

東照宮と青木石屋

青木家の先祖、青木善左衛門は北条早雲の頃小田原に移住し、分国中石屋棟梁として、小田原北条氏の御用に従事した。優れた石工技術が徳川家康にも認められて関八州石工棟梁を命ぜられ、江戸日本橋に屋敷、築地に石置場を与えられ(後の小田原町)親子で在留した。その後も代々石屋を営み、石垣の調達や石工の派遣等 を采配し活躍する。東照宮はこの恩を感じて建てたとのことである。

本応寺

法雨山本応寺と呼ばれる 法華宗寺院。本山は新潟県 燕三条の本成寺で、六老僧 の一人、日朗上人の流れをくむ。寛永 13 年（1636）開創。当初は本乗寺と称したが本寺と読みが似ていたため今の寺号に改めた。開山は日雄上人(是信院日雄大 徳)。羽原新右衛門忠次夫妻が開基口。新右衛門の妻は藩主稲葉正則(春日局の孫)の乳母(小田原局)であり、正則は労にむくいるため、田畑を添え一寺の建立を許可した。本尊は三賓諸尊。明治 28 年（1895）の大火で堂宇は焼失した。墓地には、開基羽原夫妻らの珍しい大型法華宝塔が三基残る。

益田邸(掃雲台)跡

益田孝は三井商事から三井財閥の大番頭を務め男爵を授けられた財界の第一人者。明治 39 年(1906)からここに老後の屋敷建設を始め 7 年後の 67 歳から 92 歳で亡くなるまで住んだ。約 3 万坪の邸内に茶席 11 を設け近代茶人の道を拓いた。また蜜柑・梅を植え、鶏舎・豚舎、毛織物・缶詰工場から国産品陳列館までを設けた。農産業研究を進め、石垣山を始め各所に農場・牧場を開いた。さらに五分搗き米を常食するなど保健長寿生活を勧めることも行なった。昭和 4 年(1929)には木炭乗用車を開発してお年始まわりをして、ガソリン不足の警告をしたとも伝えられる。掃雲台は現在宅地分譲され、当時の遺物の多くは四散してしまった。

興徳寺

『風土記稿』によると、古くは大雲軒と号し、小田原府内にあったが、大永 5 年(1525)北条氏康と夫人が中興開基となって小田原谷津村に移し、悦叟宗忻和尚(後に栢山善養寺開山)を開山とし、大雲山興徳寺と号した。承応 3 年（1654)に板橋村の現在地に移った曹洞宗の寺。

靈寿院

古稀庵跡を挟んで興徳寺右隣にある。万年山と言い開山は香林寺三世竹堂元巨和尚。天文 15 年(1546)小田原北条氏の臣山中隼人の母が開基。本尊は釈迦。本堂前の寛永 18 年(1641)三界萬靈等は「伏日庚申結等」「二世安楽」等の銘文から当地での庚申信仰を証明する一番古い石塔だと言われている。

宗久寺

寶砂山宗久寺(曹洞宗)は、天正元年（1573)に鳳山龍徹和尚(香林寺七世)が開く。中興は堯室和尚。昭和初期には早川海蔵寺と繋が深かった。

本尊は正観音坐像。寺域は明治末の益田邸建築の折にかなり譲り、墓地も移動した。本堂は関東大震災で潰れ、そのとき残った瓦を用いて再建したが、昭和 51 年に現在の建物になる。

御塔生福寺

元享 2 年（1322）朗慶上人開創の象鼻山妙福寺と永正 2（1505）日周上人開山の浄水山蓮生寺が、大正 2 年（1913）に合併して、御塔生福寺となる。御塔は日蓮聖人が象鼻岩上に立てられた石の宝塔によるという。

　妙福寺(板橋 363) は、板橋富士山のお塔坂にあったが箱根登山鉄道や国道工事によって境内を削られ、移転合併した。本堂には日蓮坐像、鬼子母神像が安置され、格天井には、龍の墨絵がある。この龍は妙福寺時代に「夜になると早川の水を呑みに出る」という伝説があった。本堂脇に「お岩稲荷さん」がある。小田原のみゆき座で、四谷怪談上演の節、役者が参詣したと いう 。

古稀庵

足軽から元帥公爵へと出世した明治の元勲山縣有朋が、明治 40 年(1907)古稀(70 歳)を迎えた際に建設し、42 年から 13 年間住んだ終の棲家で、小田原の代表的な別荘であった。約 1 万坪の屋敷に、簡素な古稀庵・皆春荘・暁亭を建て、1800m の専用水道で荻窪用水を引いて、流水を活かした立派な庭園を設けた。現存するのは皆春荘と古稀庵の門と庭園の一部のみである。



皆春荘
大正 3 年(1914) 山縣が清浦奎吾の別荘を買ったもの。主屋は、優れた意匠の数寄屋建築で、 関東大地震の被害も少なかった。山縣は自ら指揮して庭園を造り「打いだす相模の海を池にしてあふぐ箱根は庭の築山」との句を詠んでいる。

山月

大正 9 年(1920) 、大倉財閥を築いた大倉喜八郎（1837-1926）が古稀庵の西に建てた別荘共寿亭。外観は御殿風だが内部は濡酒な造りで大地震でも無傷だった。 山月は割烹旅館の名称である。

香林寺

南谷山と号する曹洞宗の名刹。創建は一説には寛正 5 年(1464)とされ

るが、文明 16 年（1484）に近くの南谷にあった薬師如来を移し本尊として開創したとする。三ツ鱗が寺紋。開山の大樹乘慶(海蔵寺の二世天室正運の法嗣・1510 年没）は鎌倉北条氏ゆかりの人と伝えられる。『延享度本末牒』によれば、末寺 19 ヲ寺を持ち、早川海蔵寺・久野総世寺とともに曹洞宗の小田原三カ寺と称された。末寺の多くは板橋から箱根にあったが、九世理吟文察は三島に長泉寺、矢倉沢に江月院等を聞いている。当山には 貴重な古文書多数、開山使用の笈や二世津英桂 染使用の芭蕉布の袈裟など多くの寺宝がある。 建物では山門が一番古く、元禄 11 年（1698）再建の棟札が残る。

量覚院と火祭り

　造立は慶長元年（1596)。大久保氏が代々信仰していた遠州秋葉山三尺坊権現を相模守忠隣が 当地に勧請した。秋葉社(本地仏正観音)の別当量覚院(大徳山秋葉寺)が江戸時代の呼称だった。

　開山は一月坊竺禅で本尊は「風土記稿」に不動とあるが今は十一面観音との事。天台宗寺門派だったが戦後は本山修験宗(聖護院)に戻る。例年 12 月 6 日の火祭りは午後から夜にかけて催され、紫灯を焚いた山伏による祈祷と信者も参加する火渡りがある。三尺坊の神像は、烏天狗で山犬に跨る。口に独鈷を咥え、足に四匹の蛇がまとわる。かつては火難除けの神として広く信仰された。明治 5 年(1872)の神仏分離で火之迦具土神とされた。 元宮は富士山山頂にある。

常光寺

板橋地藏堂の東側路地を入ると常光寺がある。明星山と号する浄土宗の寺。創建は一説には慶長 8 年(1603) といわれるが、『風土記稿』は慶安元年(1648) 観蓮社乗誉巖公上人が開いたとする。 巖公は伝肇寺(みみづく寺)十三世で、隠居してこの寺に移った。本尊は阿弥陀如来。足柄 観音 27 番札所に数えられた。



板橋地藏尊(宗福院)



金竜山宗福院の地藏堂で、現在香林寺が管理している。地藏尊は弘法大師作と伝承される延命子育地藏菩薩で、古くは湯本茶屋の字内古堂にあった。永禄 12 年(1569)香林寺九世理琴文察和尚が、弘法大師の二大誓願(現世の厄除け招福と死後の浄土安楽)を広めようと発願して、当地に身の丈 3m の大きな地藏坐像を造り、その体内に移して本尊とされた。それゆえ「腹籠りのお地藏さま」とも呼ばれる。

　宗福院は慶長 3 年(1598)堂地に開かれ十王堂も建てられた。正月と 7 月(現在は 8 月)の 23・ 24 日の縁日には、新仏の供養に 3 年間続けて参詣する風習が生まれたりして西相模一円からの参詣で大変賑わう。天保期の町並み図によると正面に宗福院、左に地藏堂、右に十王堂が建つ。今の建物は、城山慈眼寺の仏殿を明治 8 年(1875)の火災後に移築した。平成 8 年、黄柴宗様式の方三間裳階 付仏殿として県重要文化財に指定された。

　堂の入口右手の鎮守福興大黒尊天（360cm)は関東大地震直後に城山の楠の生木に彫刻された復興大黒神が昭和 52 年(1977)に改称遷座した。

小田原用水(早川上水) 板橋字水神ノ森

取水口は板橋の字水神ノ森にある。箱根板橋を過ぎて、左手の家並みが途切れ、早川を見渡せる地に木食観正碑、箱根用水裁判に関わる市川文次郎頌徳碑が建つ。川べりに降りると用水の取入れ口である。『風土記恒』には、「小田原用水早川の涯に水門(高さ 1 丈 2 尺・幅 8 尺)、を設けて水を堰入、村中を流れ(幅 6, 7 尺)、小田原山角町に入り、府内(小田原城下)の飲水となす。又村内東海道の傍に、小なる留井を設、非常に備ふ」とある。水路は板橋地藏尊南を通り、松永記念館、香林寺道途中から右に折れ、旧東海道よりも北を並行して東に流れる。光円寺から暗渠になり、東海道を東に流れ末は山王川河口に注ぐ。

　板橋村では飲水、水田用水・水車の動力に用いられていた。村の東と西には板橋がかけられていた。これを由来とし、大久保氏が小田原城主になると大窪村を板橋村に改め、明治になってから大窪村に復したと言われる。